

「新型コロナウイルス感染に起因すると考えられる精神症状に関する疫学的検討と支援策の検討に資する研究」

新型コロナウイルス感染罹患後の精神症状の発現率に関するレセプトデータ解析

分担研究者 福田 治久（九州大学大学院医学研究院 准教授）

研究要旨

本研究は、HER-SYS データと医療レセプトデータを個人単位でリンケージし、COVID-19 罹患後の精神症状発現率を明らかにすることを目的に実施した。分担研究者によって構築された VENUS Study のデータベースを用いて解析を実施した。結果として、COVID-19 罹患者は呼吸器感染症（RTI）罹患者に比べて精神症状発現率が高い傾向にあることが認められた。ただし、RTI 罹患者においてもコロナ禍によって精神症状発現が増加している可能性があることが明らかになった。今後の研究では、精神症状の種類や程度、感染の重症度や経過などについて、ワクチン接種状況別に調査し、感染症対策や精神症状への対応策の改善に資する解析を行うことが重要である。

A.研究目的

本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）罹患後の精神症状の発現率について疫学的に明らかにすることを目的としている。研究協力自治体から取得した HER-SYS データおよび医療レセプトデータを個人単位で突合して、COVID-19 罹患者と非罹患者のその後の精神症状発現率を比較し、COVID-19 感染による精神症状の影響を明らかにすることを目指す。

B.研究方法

本研究では、分担研究者が構築している VENUS Study プロジェクトに参加している 4 つの自治体から、HER-SYS（新型コロナウイルス感染者等情報把握・管理支援システム）データ、医療レセプトデータ、住基台帳データを個人単位で連結したデータベースを使用した。

HER-SYS データは感染症法の発生届情報に相当することから、各自治体における COVID-19 陽性者に関する情報と当該症例の陽性判定日を把握することができる。また、VENUS Study における医療レセプトデータは、国民健康保険加入者および後期高齢者が含まれ、被保険者の

全ての保険診療情報を把握することができる。本研究では、COVID-19 罹患後の精神症状の発現状況を評価するために使用した。

入院イベントや受診イベントそのものが精神症状を引き起こす可能性があることから、COVID-19 罹患者に対するコントロール群として呼吸器感染症罹患者を設定した。COVID-19 罹患者は HER-SYS から判定し、呼吸器感染症罹患者は医療レセプトデータから ICD-10 が J00-J22 である場合と定めた。

本研究のアウトカム情報である精神症状の検出には、精神症状の検出には、COVID-19 もしくは RTI の罹患発生月から 3 ヶ月以内に新規に発症した F コード（ICD10：F00-F99）とした。罹患発生月より以前に F コードが出現している症例は解析対象外とした。

統計解析は、目的変数に罹患発生月から 3 ヶ月以内の精神症状の有無を用いたロジスティック回帰分析を行った。曝露変数に COVID-19 罹患もしくは RTI 罹患とすることで、COVID-19 罹患によって精神症状の発現率の違いを評価した。

C.研究結果

解析対象者は、COVID-19に罹患した入院患者が427名、外来患者が1,903名であった。精神症状の発生割合は、入院患者では、F0 = 7.5%, F1 = 0.0%, F2 = 6.4%, F3 = 5.8%, F4 = 4.5%であった。一方、外来患者では、F0 = 0.6%, F1 = 0.0%, F2 = 0.6%, F3 = 0.7%, F4 = 1.4%であった。

RTI罹患者に比べたCOVID-19罹患者の精神症状の発生状況は、F0では外来症例における従来株流行期（オッズ比：3.38, [95%信頼区間：1.61-7.09]）に、F2では外来症例における従来株流行期（5.79 [1.37-5.79]）に、F3では入院症例における従来株流行期（2.04 [1.37-5.79]）およびデルタ株流行期（2.08 [1.02-4.25]）において高かった。

また、RTI罹患者におけるコロナ禍前に比べたコロナ禍後の精神症状の発生は、特に外来症例においてF0, F2, F3, F4において統計学的に有意な増加を認めた。

D. 考察

本研究は、日本において初めて、HER-SYSと医療レセプトデータをリンケージし、COVID-19罹患者後の精神症状の発現状況を明らかにした研究である。この研究により、COVID-19と精神症状との関連性について、より深い理解が得られることが期待される。

研究結果によれば、COVID-19罹患者は、RTI罹患者に比べて、精神症状の発現率が高い傾向が認められた。これは、COVID-19感染が、感染者の精神的健康に直接的・間接的な影響を及ぼしていることを示唆しており、今後の感染症対策や精神症状への対応策の検討において、重要な知見となるであろう。

また、RTI罹患者においても、新型コロナウイルス感染症の流行（コロナ禍）によって精神症状の発現が増加していることが認められた。これは、感染症の流行が、一般的な呼吸器感染症の罹患者においても、精神的健康に悪影響を与えていることを示している。このことから、

コロナ禍における精神症状の対策は、COVID-19罹患者だけでなく、RTI罹患者に対しても重要であると言える。

本研究の成果は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う精神症状の発現について、有益な情報を提供している。今後は、この知見をもとに、感染症対策や精神症状への対応策の改善が求められるであろう。さらなる研究が必要であるものの、本研究は、公衆衛生上の重要課題であるCOVID-19と精神症状との関連性を明らかにする一助となっていると考えられる。

今後の研究では、本研究で得られた知見をさらに深化・発展させることが重要となる。具体的には、以下のような課題に取り組むことが求められる：

1. 精神症状の種類や程度による違いを詳細に調査することで、COVID-19感染によって特に影響を受ける精神症状を特定し、その対策を検討する。
2. COVID-19感染の重症度や経過による精神症状の発現の違いを明らかにし、感染者へのサポートや治療法の最適化を図る。
3. 社会的・経済的要因や感染症対策の影響による精神症状の発現の変化を検証し、適切な対策や支援策を提案する。

これらの課題に対処することで、COVID-19感染症と精神症状との関連性をより正確に把握し、感染症対策や精神症状への対応策を適切に実施することが可能になると期待される。また、こうした取り組みは、新型コロナウイルス感染症だけでなく、今後の感染症における精神症状への対応にも役立つと考えられる。

E. 結論

COVID-19罹患者はRTI罹患者に比べて、精神症状の発現率が高い傾向が認められた。また、RTI罹患者においても、コロナ禍によって精神症状の発現が増加していることも認められた。

F. 健康危険情報

該当なし

G.研究発表

1.論文発表

該当なし

2.学会発表

福田治久. 新型コロナウイルス感染症罹患後における精神症状の発生状況. 第119回日本精神神経学会学術総会. 2023年6月22日～24日. 横浜.

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1.特許取得

該当なし

2 実用新案登録

3.その他

該当なし